

## 観光地発展段階論の系譜

——新時代の観光開発と観光マーケティングのための基礎理論を求めて——

### An Essay on Patterns and Models of Tourism development

石井 昭夫\*

Akio ISHII

Over the 50 years of mass tourism which had started in 1950s in Western Europe and North America, many tourist resorts were newly born and declined. Several forerunners in tourism research tried to explain patterns of tourism development by observing and analyzing different cases, and created models to provide planners and organizers with tools to manage their growth as well as to contribute to effective marketing of destinations.

This article introduces some basic and epoch-making theories on tourism development in order to help students better understand evolution of tourism resorts.

**Keywords :** 観光地発展段階論 (theories of development stages of tourism)、  
ドフェール (Pierre Defert)、クリスタラー (Walter Christaller)、  
バトラー (Richard Butler)、ブロッグ (Stanley Plog)、サステイナブル・ツーリズム

#### はじめに

第二次世界大戦が終り、1950年代に欧米の先進諸国がマスツーリズム時代を迎えてから50年が経過した。航空機の技術革新により、国際観光客の行動半径は拡大の一途をたどり、今では地球上、観光客の足の及ばないところを探すほうが難しい時代になった。何もなかった僻地の海岸地帯や大洋に孤立した小島嶼に新しい観光地やリゾートが続々と生まれ、他方では古くからの観光地やリゾートが衰退の道を辿った。

今日、観光産業は世界最大の産業といわれ、観光がもたらす経済効果を求めて、世界のほとんどの国が国際観光客の誘致をはかり、また、先進諸国の多くが観光を地域振興の有力な手段と見なしている。観光がコストを上回る経済的効果を生み出すためには、ある程度の大量化、大型化は必至であるが、その一方で、良好な環境に依存する観光がマスツーリストを受け入れ

ることによって、上質の観光客に見限られたり、環境の劣化を招いて当該観光地を衰退に追いやってきた事例は、観光発展史の中で枚挙にいとまがない。マスツーリズムの先頭を切って大発展したスペインのビーチリゾートが、80年代以降、衰退期を迎えて懸命の再生策を取っている姿は、世界の観光界の注目の的となっている。

観光地はどのようにして発展するのか、あるいは、観光地の人気が上がったり下がったりするのはなぜか。観光振興に携わる関係者の多くが自問自答する素材にして最も現代的なこれらに間に答えようとする試みは、意外なことに、早くもマスツーリズムの揺籃期の1950年代に始まっている。最も現代的な課題であるサステイナブル・ツーリズムに係わる研究においても、また、観光地のマーケティングという文脈の中でも、これまでの研究者による観光地の発展段階につい

\* 立教大学観光学部教授

での考察は示唆に富むところが多い。

以下、観光地発展段階論ともいべき諸論について、多少の解説を加えつつ紹介してみたい。

## 1. ドフェールの観光地評価法

観光地がある種のパターンを辿り、一定の段階を経て発展するという考え方を最初に提示した研究者は、観光地評価法ともいべき方法論を提唱したフランスの地理学者ピエール・ドフェール (Defert, 1954) であろう。彼は、リゾートの評価を行なうのに、個々のリゾートへの入り込み観光統計の信憑性が乏しいことから、実際の観光客数でなく、容易に入手し得る宿泊施設のキャパシティ (ホテルのベッド数) と地域の人口を用いて、以下のように指数化した。

$$\text{観光の機能 } T(f) = \frac{\text{ベッド数 } (L) \times 100}{\text{地域の人口}}$$

興味深いのは、ドフェールが小村落から大都市まで、既存の市町村のもつ農業、漁業、工業、政治・行政、軍事などの機能に対比して、観光機能 *fonction touristique* という概念を提示したことである。ドフェール指数が高いということは、地域経済に対する観光の役割が高いということを示している。この数字を、彼自身が当時のいくつかの観光地にあてはめた例をみると、ドーヴィル (47)、ヴィシー (29)、シャンボール (13)、シャモニー (120)、ツール (1.14)、ルツェルン (5.9) などとなっている。これらの数値をリゾートの態様別 (温泉、ビーチ、山岳、ウィンタースポーツ、など) に比較して見れば、それぞれのリゾートが、他の機能との比較において、観光機能がどの程度のウエイトをもつか、また、その発展の度合いが幼年期、青年期、成熟期など、リゾートの発展段階のどのレベルにあるかを知る手がかりになるというわけである。

ドフェールによれば、「リゾートは、生まれ、年をとり、死亡すると考えることも不可能ではない。生物と同様に、個々のリゾートにも寿命があるが、リゾートは観光客の要求を取り入れることによって新しい寿命を獲得できる …」として、のちのブロッグやバトラーの発展段階論に通じる議論を展開している。リゾート再生の事例として、彼はツェルマットを上げている。当時ツェルマットは、アルピニズム (登山拠点地)

のリゾートとしては成熟段階に達していたが、スキーリゾートとしては新規開発されて間がなく、まだウィンターリゾートとしては少年期にあるとして、このような観光魅力 (資源) の変更によって、観光地の再生の可能性に言及している。

ドフェールの観光機能指数は、その後観光地の評価や発展度を計る考え方として様々に応用されている。ホテルのベッド数の代りに、実際の観光客到着数または宿泊日数を入れることによって、より実質的な評価をしようとする「観光集中度」 (Tourism Intensity Index: TII) はその好例である。これは、元々ドフェール自身が信頼できる統計数字さえあれば、実際の客数のほうが望ましい変数であるとしている。とくに季節性の高い地方の観光産業の場合、ベッド数を用いたドフェール指数だけでは実態を表すのが困難だからである。また、途上国の観光評価において、首都の占める地位を示す首都指数 (全国人口対全国の宿泊ベッド数と首都の人口対首都のベッド数の対比) が使われるなど、様々なケースに応用されている。

## 2. クリスタラーの観光地境界立地論

ワルター・クリスタラーは、人間による空間の経済目的の利用を、1) 農林業用地、2) 鉱業用地、3) 漁業・航海海域、4) 工業用地、5) 商業・金融等都市センター機能、そして、6) 都市や工業地を離れた観光用地、の6つに分類した (Christaller, 1964)。彼は、観光地は境界 *periphery* に立地すると論じ、ビジネスや教育目的 (知的関心の満足) を基礎とする周遊型観光と区別し、スポーツ、レジャー、休養目的の長期滞在用の観光地、今でいうリゾート論を展開した。

第二次世界大戦後、観光は都市生活や労働生活からの逃避脱出という個人的欲求のレベルから、経済社会的なニーズへと変化し、マスツーリズムの展開の中で、リゾートは人々が探し求めて自然発生的に誕生し発展するものから、国民の精神的肉体的健康保持のため、あるいは地域振興や経済的効果を求めて、意図的に開発されるものへと変化した。クリスタラーの着眼は、本来豊かな農耕地や良好な生活環境の地、すぐれた工業立地の場所は、概して多くの居住者を集めて市街化しており、リゾート立地はそのような場所を避け、各種産業が立地し得ないような山岳高地や既存産業に縁のない海岸地帯、森林、沙漠、その他の景勝地へ向かうと考えた。そうした場所を開発して経済的利益を獲

得ることが観光開発であり、その意味で、典型的な観光地は辺境に立地すると論じた。この場合の辺境とは、国内的には大都市から離れた周辺の未開拓の景勝地であるかもしれないし、ヨーロッパ大陸におけるリビエラであったり、ジェット航空機時代以降は、遠く大洋の中の群島かもしれない、時間的空間的にいかようにもあてはめて論じることができる。この論文の中で、彼が典型的な観光地発展の経過として描写した「絵描きは絵を描くために知られざる珍しい場所を探し出し、その場所はやがて知る人ぞ知る先端流行地となり、やがて俗化して……」というくだりは、バトラーの観光地発展周期論に引用されて有名になった（巻末に掲載したバトラーの論文の翻訳を参照）。

クリスタラーの観光辺境立地論は、元々西ヨーロッパを念頭に提示されたものだが、途上国の観光開発が世界的課題になるに至って注目される。地理的にも経済的にも、当時のヨーロッパの辺境であったスペインが、産業地としては全く不毛な海岸地帯を観光開発し、太陽（Sun）と海（Sea）と砂浜（Sand）の3Sを求めるイギリス人、ドイツ人をはじめとする北部ヨーロッパ人たちの休暇滞在地として大発展を遂げた。航空機旅行の初期の人気デスティネーションとなったマジョルカ島やコスタデルソル、カナリア諸島などのスペインのリゾートの成功が、航空機のさらなる発達によって、何はなくても「3S」には事欠かない世界の辺境の地である発展途上諸国の観光にかかる期待を膨らませてゆく。

発展途上国の観光開発というテーマは、主として西ヨーロッパの観光開発を前提に論じられてきたドフェールやクリスタラーの時代の枠を超え、環境問題や異文化接触などの関わりを含め、多くの研究者の関心を引き、無から有を生じる途上国の観光開発のための理論を生むことになる。

### 3. プロッグのアローセントリック/サイコセントリック論

スタンリー・プロッグは行動科学研究所 Behavior Science Corporation (Basico) を主催する心理学者で、1967年航空業界の委託を受けて、1) 飛行機に乗らない人達はどのような人達か、2) その人達はなぜ飛行機に乗らないのか、3) 彼らに飛行機に乗ってもらうにはどうすればよいか、という問に対する答えを見出すべく研究を開始した。当時ボーイング社はジャン

ボジェット B747 の投入を数年後に控えていたが、当時の航空旅客の予想伸び率は、予想座席供給量の半分に過ぎず、航空業界にとって、将来人々をいかに沢山航空機に乗せられるかが大きな課題だったのである。

プロッグの研究 (Plog, 1972) は、人がなぜ飛行機に乗らないかを様々な角度から調べることによって、飛行機に乗らない人々は、飛行機に限らず日常生活のあらゆる面で冒険を犯そうとせず、多くのことに不安を覚える人達であるという仮説を得る。そこで、プロッグは自己抑制的で神経質、冒険嫌いのタイプを、自己を意味する *psyche* と、自分の思考や関心を生活の小さい問題に集中するという意味での *centric* (中心の) を組み合わせた造語により、サイコセントリック *psychocentric* と呼ぶことにした。このタイプの対極に、好奇心旺盛で何でも見てやろうという冒険心に富むタイプの人達があり、彼はこの人達を *allo* (他の) と *centric* (中心の) を組み合わせて、アローセントリック *allocentric* と名づけた。この両極端の性向を持つ人々の中間に、サイコセントリック寄りのニアサイコセントリック *near psychocentric*、アローセントリック寄りのニアアローセントリック *near allocentric* があり、そして真ん中の平均的多数をミッドセントリックと名づけた。人々は全てこれらのタイプのいずれかに属し、しかもほぼ規則的に分布していることをサンプリング調査によって確認した。

プロッグは、飛行機に乗らない人達の性格分析から出発して、観光者のパーソナリティへと考察を進め、観光地はまずアローセントリックによって見出され、次第により保守的な層にもアピールし、最後にサイコセントリックにまで受け入れられるに至るという一連の変化を曲線グラフで示した。そして、各観光地がどのタイプの客層を現に引きつけているかを知れば、観光地の発展段階を知ることができることと論じたのである。プロッグはこの仮説を実際の観光地にあてはめて、ニューヨーカーにとっての世界の観光地が、アローセントリックからサイコセントリックに至る曲線のどこに当てはまるかを図示した。これはまさしく、クリスタラーが描写した観光地の典型的な発展課程を理論化したものといえる。巻末に掲載したプロッグの論文の翻訳にこの図表も含まれているので、関心ある方は参照して頂きたい。

ドフェール、クリスタラー、バトラーはじめ、観光地発展段階論を提起した研究者はほとんど全て地理学

系の研究者であるが、どきまわりのバンドのミュージシャンとして旅に暮らしたのち、朝鮮戦争に従事したことから進路を変え、トラベル・リサーチ専門家への道を歩むことになったブロッグは、旅行者の性格という視点から観光地の発展段階に言及した数少ない研究者のひとりである。ブロッグの論の面白いところは、地理学系の研究者の理論とちがって、需要サイドから観光地の発展段階を捉えているため、観光地のマーケティングの面で多くの示唆を与えていることである。事実、ブロッグは1991年に出版した *Leisure Travel* (1991) において、それまでの自説を観光マーケティングに適用し、今後は、旅行者の性格に配慮した観光マーケティングが不可欠であるとして、アローセントリック対象のマーケティングとサイコセントリック対象のマーケティングの相違を論じている。もちろんアローセントリックはごく少数の客層であるが、アローセントリックを対象としたマーケティングは、アローセントリックの傾向をもつ消費者にアピールするし、同様に、サイコセントリックを対象とするマーケティングはニアサイコセントリックにもアピールするのである。ターゲットを明確にするマーケティングがますます求められる時代にあつて、商品構成からプロモーション活動の在り方まで、観光者のパーソナリティに対応して変えるのが当然とするブロッグの論には説得力がある。この方面については、また、別の機会に追及してみたい。

かくて、ブロッグの論もまた、バトラーの観光地の発展周期論に紹介されて広く知られるところとなり、観光開発論の教科書に欠かせない理論となった。

なお、ブロッグはその後アローセントリック/サイコセントリックというネーミングを変更して、アローセントリックを冒険型 *Venturer*、サイコセントリックを依存型 *Dependable* と呼び変えているが (Plog, 1998)、今のところ、他の研究者はその後の論文でも、元のネーミングをそのまま用いているようである。

#### 4. バトラーの観光地発展周期論

バトラーの観光地の発展段階に関する論文は、観光開発に関する文献の中で研究者に最も大きなインパクトを与えた理論である (Oppermann & Chon, 1997)。バトラーは、最初の論文 (Butler, 1980) の中で、観光地の進化を、1) 探検段階 *exploration*、2) 参加段階 *involvement*、3) 発展段階 *Development*、4) 完成

段階 *Consolidation*、5) 停滞段階 *Stagnation*、6) 衰退 (*Decline*) 又は再生 (*rejuvenation*) 段階、の6つの段階を経るというモデルを提示した。

すでに見てきたように、バトラー以前にも観光地に一定の発展パターンが見られることを論じた研究者は少なくなく、むしろ、バトラーの理論は、先行研究を統合して分かりやすいモデルを提案したところに価値がある言ったほうが適切であろう。事実バトラーは、当該論文の中でクリスタラーとブロッグの理論を援用しているほか、スタンフィールド (Stanfield, 1978) やノロンハ (Noronha, 1976) やコーエン (Cohen, 1978) 等の理論を紹介している。ほかに、彼以前に観光地の発展段階を論じた研究者としては、スロー (Thurot, 1973) が3段階の発展を提案し、ミオセック (Miossec, 1976, 1977) が5段階説を唱えていた。

バトラーの特徴は、それまでの理論を整理し、モノ商品について論じられていたライフサイクルの理論を、観光地の発展から衰退への過程にあてはめたこと、すなわち、無制限に右肩上がりの発展を続けることはあり得ないことを推論し、シンプルな図形によってその推移を示したことである。論文の副題が「観光資源の管理のための一視点」とされているように、観光はその本質の中に衰退の芽が存在しており、そのことを意識した対策なしには不可避免的に衰退への道を進むという仮説を提出した。そのような特徴を有するが故に、地域の観光開発の責任者は、開発計画をたてるに当たり、行き過ぎをとどめるための限界をあらかじめ計画の段階からインプットしておくべきことを示唆している。この理論はサステイナブル・ツーリズムの考え方を先取りしたもので、のちの研究者が、観光における限界収容力 *carrying capacity* や、これを発展させた形の成長管理 *growth management* の議論について考察する際の出発点となった。

観光地発展段階論は、途上国の大半が国際観光に参加するようになって以来、極めて重要な開発計画のための理論を提供することになった。バトラーらの理論を実際に用いて、カリブ海やアジア太平洋地域の発展途上国の観光開発の事例研究が沢山行なわれた。これらについては、マーチン・オPPERマンと K. S. チョン (Oppermann and Chon, 1997) が、多くの研究を整理して紹介しているので、研究のためのガイドとして参照に値する。

## まとめ

ブロッグの論もバトラーの論も発表されて以来、多くの研究者に言及されてきた。バトラーのモデルは、観光客を受け入れる側から見た観光地の発展段階論であり、ブロッグのモデルは需要側から見た発展段階論である。それぞれが核心を突いた理論であるからこそ、人々が観光地の在り方を考える際に避けて通れない理論となり、ともに、個別の観光地の発展度合を考察する際に様々なヒントを与えてくれる。

観光地の発展を不可逆的な進行と捉えている点を批判する研究者もいる。バトラーの理論が、誕生から消滅に至る商品のライフサイクルの考え方を採り入れているために、最後には衰退から消滅へのコースを辿ることを暗示するのは当然だが、むしろ、オPPERマン (Opperman and Chon, 1997) は、ブロッグのモデルこそ、ドフェールやバトラーと違って、再生の余地のない決定論的で、さらに救いが無いと言っている。

もちろんブロッグもバトラーも、同じ所にとどまっているわけではない。その後両者とも、実践上の課題としての理論展開を図っており興味深い。これらについては、別の機会に譲るとして、上に引用したものを含め、私が参照した文献を以下に掲載しておく。

## 主要参考文献

- Butler, Richard (1980). The concept of A Tourist Area Cycle of Evolution, *Canadian Geographer*, X X IV, 1.
- Butler, Richard (1993). *Tourism Development in Small Islands : Past Influences and Future Directions*, The Development Process in Island States. Routledge, London.
- Butler, Richard and Tom Hinch (1996). *Tourism and Indigenous Peoples*, Thomson Business Press.
- Christaller, Walter (1963). Some Considerations of Tourist Location, *Regional Science Association : Papers VII, European Congress* (同趣旨の論文は最初1955年にドイツ語で発表された。これは1963年のドイツ語の論文の英訳である)。
- Defert, Pierre (1952). *Les Fondements Geographiques du Tourisme*, *The Tourist Review* No. 4.
- Defert, Pierre (1954). *Essai de Localisation Touristique*, *The Tourist Review* No3.
- Defert, Pierre (1960). *Pour une Politique du Tourisme en France*. Les Editions Ouvrieres, Paris.
- Gartner, William C. (1996). *Tourism Development: Principles, Processes and Policies*, John Wiley & Sons, Canada.
- Gee, Chuck Y and Makens, James C. (1997). *The Travel Industry* (3rd edition), Van Nostrand Reinhold, New York.
- Middleton, Victor T.C. (2001). *The Balearic Islands of Spain : Strategy for More Sustainable Tourism Development*, *Marketing in Travel and Tourism* (3<sup>rd</sup> edition), Butterworth Heinemann, Oxford.
- Oppermann, Martin & Choy, K.-S (1997). *Tourism in Developing Countries*, International Thomson Business Press, Oxford.
- Plog, Stanley (1974). Why Destination Areas Rise and Fall in Popularity, *The Cornell H.R.A. Quarterly*, Feb.
- Plog, Stanley (1991). *Leisure Travel*, John Wiley and Sons, Inc., New York.
- Plog, Stanley (1998). Why Destinations Preservation makes Economic Sense, *Global Tourism* (2<sup>nd</sup> edition), Butterworth Heinemann, Oxford.
- Priestley, G.K. (1995). *Evolution of Tourism on the Spanish Coast*, *Tourism and Spatial Transformation*, CAB International, UK
- Williams, Peter and Gill, Alison (1998). *Tourism Carrying Capacity Management Issue*, *Global Tourism* (2<sup>nd</sup> edition), Butterworth Heinemann, Oxford.